

第96回全国高校サッカー選手権大会千葉県大会 総評

平成29年7月22日から8月2日までの日程で一次トーナメントが、10月8日から11月23日までの日程で決勝トーナメントが行われた。

真夏に行われた一次トーナメントでは、153校が20のブロックに分かれ決勝トーナメントを目指し白熱した試合を見せた。負けたら終わりのトーナメントということもあり、多くのチームがリスクを最小限にするために、自陣ではボールをつなげず相手の背後にロングボールを供給していた。また、高校3年間の集大成の大会と位置付ける選手や学校も多く、個人能力、チーム戦術だけでなく気迫や執念といったものもみられた。一次トーナメントを勝ち抜いた20校は技術戦術が優れていたのはもちろんのこと、真夏の中でも80分間コミュニケーションをとり続け、集中力を切らさずに自分や相手と向かい合っていたのが印象的である。

この20校にシード校を合わせた30校で行われた決勝トーナメントでは、2強時代と言われている流通経済大学付属柏、市立船橋を崩せるのが注目となった。攻撃ではロングボールで相手を押し込んでいくチーム、ボールを保持する時間を長くしてビルドアップをしながら相手のほころびを探していくチームにわかれ、守備では前線から連動してどんどん相手に圧力をかけていくチーム、完全にリトリートして守備ブロックを形成するチームに分かれていた。そのなかでも中央学院の攻撃は個人技術の高さがみられ、ドリブル主体で相手をいなしていき、観客を沸かせていた。今の時代では相手をしっかりと研究し、相手のストロングポイントを消すために選手やシステムを変えるチームが多くみられる。しかし、研究されたことを逆手にとって相手を脅かすことのできる選手や、ピッチに立ったら何かしてくれるのではという期待感を持たせてくれる選手がいなかったがこれからの千葉県高校サッカーの課題であると感じた。どのチームも止めて、蹴る、運ぶなどの個の能力は数年前に比べて格段に上がってきていて、各チームの戦力は均衡してきているが、流通経済大学付属柏と市立船橋の2強との差はなかなか縮まらない。各チームとも個人・チームのレベルアップをして来年度はこの2校の牙城を崩し、千葉県の高校サッカーがレベルアップしていくことを期待する。

最後にこの大会は会場や審判、役員など多くの方々の協力によって無事に終わることが出来た。大会運営に携わっていただいた全ての方に感謝の意を表すとともに、流通経済大学付属柏の全国での活躍を期待し、総評とさせていただきます。

千葉県立船橋啓明高等学校

上芝 俊介